様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１８３１

研究課題名（和文）職場のウェルビーイング度の向上に個人特性が与える影響

研究課題名（英文）The Impact of Individual Characteristics on Workplace Well-Being

研究代表者
小川　美香子（Ogawa, Mikako）

東京海洋大学・学術研究院・准教授

研究者番号：６０４５６３０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の前半では、データ信頼性、被験者負担等の5点から、我々が開発した「行動調査票（良かったことリスト）」を用いるデータ収集方法は、従来のウェルビーイング（WB）調査のリッカート尺度による質問票自己診断法、一日再現法等より評価が高いことを明らかにした。
　後半は、COVID-19の影響で対象をオフィスから食品製造現場に移し、WBと食品安全文化（FSC）に関する研究を行った。中小事業者4社の従業者アンケートとインタビューから、「コミュニケーション」と「周囲のサポート」の連動傾向、「施設設備」の評価が低いと「リスクの軽視」が高まる傾向、FSCが良好な組織はWBも高い傾向があること等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、我々WBE-PJが開発した「行動調査票（良かったことリスト）」を用いた測定法の有用性を明らかにした。また、WBとFSCの概念整理と、測定を目指す研究に取り組んだ。食品事業者には、科学的な安全管理システムの運用に加え、食品安全を優先する組織文化を確立・維持する取り組みが求められている。しかし、FSCの評価手法、マネジメント法、WBとの関係が不明確で、この分野での知見の蓄積が必須である。我々の研究成果は、中小食品製造業者のWBとFSCの状態と関係を明らかにした萌芽的な実証研究として学術的意義があり、現場の食品安全マネジメントに関する実務的示唆を与える可能性があり、社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：　In the first half of the study, we found that our data collection method using the Behavioral Questionnaire (List of Heartwarming Events) was rated higher than the traditional wellbeing (WB) survey method, based on five points including data reliability and subject burden.
　The second half of the study was changed to a study of WB and food safety culture (FSC) among food production employees due to COVID-19. Based on employee questionnaires and interview data from four small- and medium-sized businesses, the study revealed that "communication" and "surrounding support" tended to be linked, "disregard for risk" tended to increase when "facility equipment" was rated low, and organizations with good FSC also tended to have high WB.

研究分野：経営学、食品安全マネジメント

キーワード：ウェルビーイング　食品安全文化　組織文化　中小食品製造業者　HACCPの制度化　行動調査票　Food Safety Culture

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

情報通信技術の進展により、これまで人間が行ってきた定型的な業務が、機械やコンピュータに置き換わりつつあり、将来的に人間が行う業務は、創造性を伴う非定型な業務が中心となると考えられる。従来の定型的な業務の生産性は、定量的なアウトプットと時間で測定することができ、業務改善や自動化で生産性向上が図られてきた。一方、非定型な業務の生産性は、創造性などを測定することが難しいだけではなく、個人の感情や職場の人間関係の影響を受けやすい。例えば、若手が自由な意見を言い出しにくい職場や、互いの信頼関係が欠如した組織では、新しいプロジェクトは育たない。このような協創型の新しい働き方には、ウェルビーイングが重要と考えた。「ウェルビーイング」とは、「満たされた状態」のことであり、個人の幸福や企業の繁栄、社会の安定に関連する概念である。そして、ウェルビーイングであるときに個人の生産性が向上することが報告されている(Diener & Biswas-Diener, 2008)。今後、個人の非定型な業務の生産性や組織としての生産性を高めるために、ウェルビーイング（以降 WB とする）をマネジメントすることが、企業経営において、より注目されると考えられた。日本における WB 関連研究は、欧米にやや遅れ、1990 年代から行われてきたが、研究蓄積はまだ少ない。

そこで、申請者らは 2016 年に「ウェルビーイング工学」プロジェクト（以下、WBE-PJ）を立ち上げ、職場等のコミュニティにおける WB 度と生産性を向上させることを目的とし、組織成員の WB についての一連の研究・実験・分析を進めてきた（齋藤・杉村 2017; 大橋ら 2018; 妹尾ら 2018a, 2018b; 平野ら 2018）。WBE-PJ が明らかにしようとしてきた学術的な問いは、次の 4 点であった。

① WB をどうやって測るのか。多くの先行研究でリッカート尺度の自己診断が使われてきたが、行動ベースで測定できないか。
② WB を向上させる方法はあるのか？ポジティブ感情が効くとされるが、具体的にどのような方法があるか。
③ どのような個人の特性が、WB 向上に寄与するのか。遺伝的要因＋環境的要素＋個人の活動／努力とされるが、具体的な個人の特性とは何か。
④ WB は、組織の生産性を向上させるか。個人作業の生産性は高まるとされるが、チーム作業の生産性はどうか。

WBE-PJ では、職場等のコミュニティにおける WB 度を調査する独自の手法として、個人が「行動調査票（良かったことリスト）」に書き込む「経験抽出法」と「感謝付箋」を用いる方法を開発した。そこで、本研究では、これまでに蓄積してきた①、②および③に関する研究成果を踏まえ、③に焦点をあてた研究設計を行い、今回の研究課題を申請した。

２．研究の目的

(1) 当初の研究目的（研究の前半）

今後、個人の非定型な業務の生産性や、組織としての生産性を高めるために、WB をマネジメントすることが、企業経営において、より注目されると考えられた。そこで、本研究では、我々が開発した「行動調査票（良かったことリスト）」を用いるデータ収集方法の有効性を明らかにしたうえで、心理学分野のビッグファイブ性格特性診断を取り入れ、どのような個人の特性が、職場等のコミュニティにおける WB 向上に寄与するのかを明らかにすることを目的とした。

(2) コロナ下で見直した研究目的（研究の後半）

新型コロナウイルスの影響を受け、我々の PJ では、以前から、FSC について、WB の概念と近接する概念ではないかと議論をしていた経緯から、研究の後半では、①WB と FSC に関連する複数領域の先行研究をもとに、FSC のタイプを分類し、②食品製造事業者を対象に WB と FSC の実態や関係性を明らかにしたうえで、③FSC のタイプ別に個人の WB を低下させない、あるいは向上させる施策を、探索的に明らかにすることを目的とした。

当初の研究計画は、協創型の新しい働き方が求められる職場等のコミュニティとしては、オフィス環境を、また、個人としては、オフィスワーカーを対象にした調査を想定したものであった。しかし、新型コロナウイルスの影響で、在宅勤務が導入される等、オフィス環境が大きく変化しため、2021 年度に研究計画を見直し、職場等のコミュニティとしては、食品製造の現場を、個人としては、食品製造従事者を想定した調査とした。

この見直しに至った背景は、PJ 内で議論を重ねる過程で、オフィスではない、生産や製造、サービス等の現場でも、マネジメントにおける WB の重要性について着目していたこと、また、研究代表者が、2000 年代から、WB 研究とは別に、食品安全マネジメントの研究に従事しており、食品製造業や飲食業を対象とした研究蓄積があり、調査の実現可能性が高かったことであった。食品安全分野では、近年、国内における HACCP の制度化や食品安全規格の普及、コーデッ

クス委員会や Global Food Safety Initiative の国際動向を基に、「食品安全文化（FSC)」という概念が注目されている。食品事業者には、科学的な安全管理システムの運用に加え、食品安全を優先する組織文化を確立・維持する取り組みが求められているが、FSC の評価手法、マネジメント法、WB との関係が不明確で、この分野での知見の蓄積は、喫緊の課題であると考えられた。

(3)（参考）「行動調査票（良かったことリスト)」法のオンライン化

上記のほか、(1)に関連して、研究の前半で、当初の目的に加えて、「行動調査票（良かったことリスト)」法のオンライン化と、リストの公開による影響を明らかにする目的とした研究を行った。企業での実験に向け実験方法を見直した結果、申請時に想定していた紙ベースでの「感謝付箋」および「良かったことリスト」を用いた方法ではなく、実験参加者の負担軽減や、データ集計・分析の容易性の観点から、WBE プロジェクトで開発した「行動調査票（良かったことリスト)」法を電子化することが妥当と判断したからであった。

電子化した影響およびそのリストをオンラインで公開、かつ、組織内で共有することによる本人あるいは他者への影響（波及効果）を、試験的に測定することを目的とした実験を計画、発表し（妹尾ら 2019)、3 大学における実験を 2020 年 1 月に実施した。しかし、コロナ下で一時研究活動を休止し、分析・成果発表は未実施で今後の課題であるため、成果報告書の「２．研究の目的」において、参考として記述するにとどめる。

３．研究の方法

(1) 「行動調査票（良かったことリスト)」を用いた WB 調査方法の有効性

2016、2017、2018 年の企業での実験、2017 年のビジネススクールでの実験のデータを対象に、量的および質的分析を行い、「行動調査票（良かったことリスト)」を用いた WBE-PJ で開発した方法と、従来の WB 研究のデータ収集方法との比較を行った。従来の方法とは、リッカート尺度による質問票自己診断、一日再現法（day reconstruction method)、経験サンプリング法、ウェアラブルデバイスを装着する身体活動計測法の 4 つである。(Sugimura et, al 2019)

(2) WB と FSC - FSC のタイプ分類、FSC と WB の実態と関係性に関する調査

① FSC のタイプ分類

FSC に関する取り組みや先行研究を踏まえ、WBE-PJ での議論を経て FSC タイプ分類を作成した。FSC に関する取り組みでは、オーストラリア・ニュージーランド食品基準機構や英国食品基準庁などでは、FSC についてのチェックリストやツールを用いて、食品事業者への行政査察が行われている。FSC の尺度に関する研究では Jespersen et.al（2017）等があり、GFSI よる FSC の提言（GFSI 2018）は、彼女らの研究を反映したものとなっている。組織の成果を「関係の質」、「思考の質」、「行動の質」「結果の質」という 4 つの質の循環で考える成功の循環モデル（Kim）等を参考にした。

② 食品製造業者を対象とした WB と FSC の実態や関係性に関する調査

2022 年 9 月から 2023 年 3 月に、中小食品製造業者 4 社を対象に、事前アンケート、製造従業者アンケート、トップインタビューを実施した。従業者アンケートでは、製造に従事する社員を対象に 2 つの質問紙調査を行なった。調査 1 の FSC に関する調査が、従業者の食品安全に関わる意識と行動を、調査 2 の WB に関する調査が、従業者の幸せ、やりがい、不幸せの意識を把握する調査である。分析・考察では、まず、食品製造業の企業調査の結果を、学校給食の調理従事者の先行研究（藤崎、2020）と比較することで、食品製造業の FSC の実態を把握した。そのうえで、インタビュー調査もふまえ、FSC が食品安全行動に与える影響、FSC の維持や向上に影響を与える要因、FSC と WB との関係を検討した。

４．研究成果

(1) 「行動調査票（良かったことリスト)」を用いた WB 調査方法の有効性

WB 研究のデータ収集方法の評価は、(1)データの信頼性（短いタイムラグ)、(2)被験者負担の少なさ、(3)アフォメーション効果（宣言による現実化)、(4)収集の際に特別な器具の要否、(5)質的データと量的データを一回で収集できる、の 5 視点から行った。その結果 WBE プロジェクトによる方法が、最も評価が高かった（Sugimura et. Al 2019)。

(2) WB と FSC - FSC のタイプ分類、FSC と WB の実態や関係性に関する調査

① FSC のタイプ分類

Kim の成功の循環モデルで、「関係の質」は、挨拶、会話量、ありがとう、活気、尊重、背景理解、協働、信頼（一部割愛）の順に深まるとされる。挨拶や笑顔といった教育が一般的に行われる食品製造業者にとって納得感があり、馴染みやすいモデルであり、GFSI（2018）の 17 項目のリーダシップやコミュニケーションに関連すると考えられた。これらを踏まえ、「関係の質」を縦軸に、組織が食品安全マネジメントで重視するのが集団か個人かを横軸とした。横軸については、形式知型か暗黙知型か、もしくは主体性を重視いないか／するか、といった代替案もあっ

たが、2022 年 11 月の発表の時点においては、集団／個人と表現した。2 軸によりできる 4 象限で、食品安全のタイプを、左下から、規則絶対型、逸脱受容型、改善実践型、規則スルー型と命名した（小川ら 2022）。

② 食品製造事業者を対象とした WB と FSC の実態や関係性に関する調査

FSC 下位尺度平均点では、「コミットメント」は学校給食・食品製造業ともに最も高く、「コミュニケーション」と「周囲のサポート」は学校給食がやや高く、「リスクの軽視」と「施設設備」は食品製造業が高かった。食品製造業の調査結果では、「コミュニケーション」の下位尺度平均点の差が企業間で最も大きく、「コミュニケーション」と「周囲のサポート」が連動する傾向や、「施設設備」の評価が低いと「リスクの軽視」が高まる傾向があった。FSC の維持・向上には、従業者が安全を優先できる施設設備環境を整備し、阻害要因を排除することで、従業者が食品安全行動をとりやすくする環境を構築することが重要である。

また、FSC が良好な組織は、従業員の WB も高い傾向にあるが、FSC が良好ではない組織が WB も低いとは限らなかった。また、職場でのコミュニケーションが、各個人にとって良好な状態であることは、FSC の確立・維持、個人の WB に有効と考えられた。

FSC および WB については、組織毎に、まず、自社の状態として、下位尺度レベルで得点の高い箇所と低い箇所を把握すること、自社の特性を理解し、目標を検討したうえで、対策を講じること、継続的かつ定期的に FSC および WB を測定し、マネジメントすることの重要性が示唆された。

＜引用文献＞　※「５．主な発表論文等」に掲載のものを除く

[1] Diener, E., & Biswas-Diener, R. (2008). Happiness: Unlocking the mysteries of psychological wealth. Malden, : Blackwell Publishing.

[2] GFSI (2018). A CULTURE OF FOOD SAFETY - A POSITION PAPER FROM THE GLOBAL FOOD SAFETY INITIATIVE (GFSI), https://mygfsi.com/wp-content/uploads/2019/09/GFSI-Food-Safety-Culture-Full.pdf (retrieved 2019.11.18)

[3] Jespersen, L., Griffiths, M., & Wallace, C. A. (2017). Comparative analysis of existing food safety culture evaluation systems. Food Control, 79, 371-379.

[4] Kim, D. WHAT IS YOUR ORGANIZATION'S CORE THEORY OF SUCCESS?, https://thesystemsthinker.com/what-is-your-organizations-core-theory-of-success/ (retrieved 2022.11.13)

[5] 大橋真人・平野雅章・妹尾大・小川美香子・齋藤敦子・杉村宏之 (2018)「幸福感度とウェルビーイング度の研究　感謝がウェルビーイング度に与える影響の幸福感度別分析」、経営情報学会　全国研究発表大会要旨集, 2018t10, 17-20.

[6] 齋藤敦子・杉村宏之 (2017).「働く場所の柔軟な選択とウェルビーイング度の関係の研究」経営情報学会　全国研究発表大会要旨集, 2017s, 245-248.

[7] 妹尾大・平野雅章・小川美香子・齋藤敦子・大橋真人・杉村宏之 (2018a)「感謝がウェルビーイング度に与える影響の研究」, 経営情報学会　全国研究発表大会要旨集, 2018s, 277-280.

[8] 妹尾大・平野雅章・小川美香子・齋藤敦子・大橋真人・杉村宏之 (2018b)「幸福の志向とウェルビーイング度の研究　自己志向型と関係志向型の比較分析」経営情報学会　全国研究発表大会要旨集, 2018t10, 13-16.

[9] 平野雅章・妹尾大・大橋真人・小川美香子・齋藤敦子・杉村宏之 (2018)「感謝と幸福特性に関する研究」、経営情報学会　全国研究発表大会要旨集, 2018t10, 21-24.

[10] 藤崎香帆里 (2020)「学校給食における食品安全文化に関する研究」御茶ノ水女子大学大学院人間文化創成科学研究科2019年度博士論文.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小川美香子	４．巻 28(3)
２．論文標題 外食産業における新型コロナウイルス感染症対応の実態と課題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 フードシステム研究	６．最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5874/jfsr.21.28.3_3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hiroyuki SUGIMURA, Makoto OHASHI, Dai SENOO, Mikako OGAWA, Masaaki HIRANO, Atsuko SAITO	４．巻 －
２．論文標題 List of Heartwarming Events: Developing an Alternative Approach to Measure and Analyze Well-Being in the Social Context	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Proceedings of Pacific Asia Conference on Information Systems 2019	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 和田 義規・ホー バック・妹尾 大
２．発表標題 感情価の同調が顧客体験に与える影響の分析
３．学会等名 サービス学会 第11回 国内大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小川 美香子・河田 史子・妹尾 大・杉村 宏之・齋藤 敦子・平野 雅章
２．発表標題 食品安全文化のタイプ別にみる従業員の幸せ施策
３．学会等名 経営情報学会　2022年全国研究発表大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 河田 史子・小川 美香子
２．発表標題 食品安全文化自己評価表の開発と試行
３．学会等名 経営情報学会　2022年全国研究発表大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小川 美香子
２．発表標題 外食産業における新型コロナウイルス感染症対応の実態と課題
３．学会等名 2021年度日本フードシステム学会大会　公開シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 河田 史子・小川 美香子
２．発表標題 食品安全自己評価表の開発と試行－食品安全文化の測定手法構築に向けて－
３．学会等名 2021年度日本フードシステム学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤野 柾也・小川 美香子
２．発表標題 障害者施設におけるHACCP 導入の課題と対策
３．学会等名 2021年度日本フードシステム学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 内田 光・小川 美香子
２．発表標題 飲食チェーンにおける店舗が自律自走出来るHACCP 導入 －動機付けプロセスの状態遷移モデルを用いたA 社の事例分析－
３．学会等名 2021年度日本フードシステム学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 妹尾 大、平野 雅章、小川 美香子、齋藤 敦子、大橋 真人、杉村 宏之
２．発表標題 関係性幸福経験とウェルビーイング度
３．学会等名 経営情報学会　春季全国研究発表大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroyuki SUGIMURA, Makoto OHASHI, Dai SENOO, Mikako OGAWA, Masaaki HIRANO, Atsuko SAITO
２．発表標題 List of Heartwarming Events: Developing an Alternative Approach to Measure and Analyze Well-Being in the Social Context
３．学会等名 Pacific Asia Conference on Information Systems 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小川 美香子・平野 雅章・妹尾 大・齋藤 敦子・大橋 真人・杉村 宏之
２．発表標題 ウェルビーイング度測定手法の電子化に向けた実験計画
３．学会等名 経営情報学会　秋季全国研究発表大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 Dai Senoo, Bach Q. Ho	4．発行年 2022年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 350
3．書名 Expanding the Workplace to Promote Knowledge Creation, pp.249-260, chapter in The Routledge Companion to Knowledge Management	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	妹尾　大 (Senoo Dai) (90303346)	東京工業大学・工学院・教授 (12608)	
研究分担者	平野　雅章 (Hirano Masaaki) (00165193)	早稲田大学・商学学術院(経営管理研究科)・名誉教授 (32689)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	杉村　宏之 (Sugimura Hiroyuki)	株式会社中川ケミカル	
研究協力者	齋藤　敦子 (Saito Atsuko)	コクヨ株式会社	
研究協力者	大橋　真人 (Ohashi Makoto)	コクヨ株式会社	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関